

からは鼻の先にあり、大学関係者は自由に出入りできるので、よく利用させてもらった。安価で栄養豊富な昼食にありつくには恰好であった。初めはセルフサービスの一般学生向きとサービス付きの上級食堂に分かれていたが、滞在中の後半には、全部がセルフ・サービスへと変化した。ウーリッヒとルイーゼの案内で、ドナウ川北岸のシュワービッシェ・アルプにドライブした時、昼食はレーゲンスブルグ大学のメンザで摂った。この大学は市街地に旧キャンパスがあるが、現在、新しいキャンパスをその南部に建設中である。超モダンな講義棟など目をみはる程の立派な施設で、メンザの内容も見事であった。そして何人ものルイーゼの知合いの学生に会ったが、 Semester毎に転々とできる制度のため、学生間の交際範囲はきわめて広く融通がきく様である。大学制度とはコミュニケーションの場とも云えると思うので、ひきくらべてみて羨しいことであった。

ルイーゼの都合の付かない時は代理にレナーテがフォルクスワーゲンを調達して来て案内してくれた。レナーテはカーラやドリスを誘い、皆でオリンピック・トルムに登ったりしてから、もっともババリア風だというビアホールで乾杯したりして、愉快的な休日をお過ごした。私を含めて皆で割り勘だったことも、楽しい思い出の原因となっている。

(1973年11月)

東京のスカイライン

正井泰夫

去年(1972年)の6月に、現在の文教育学部本館が完成してからは、研究室の窓外にすばらしい東京のスカイラインが展開している。もっとも、スカイラインといっても自動車の名前ではなく、都市景観がつくっている地平線のシルエットのことであるが。

第2次大戦が終って間もない頃は、この大塚あたりの高台から都心の方を望むと、議事堂ばかりが圧倒的な高さで立っていたことを思い出す。当時、地上からの高さが64mに達する議事堂は、日本最高の建物としてよく知られており、政治が中心であった時代の象徴的な景観としての名残りをよく示していたものである。

ところが、東京タワーに象徴されるような高い鉄塔がいくつも東京のスカイラインをにぎわすようになって、議事堂の圧観は急速におとろえていった。とはいっても、れっきとした建物としては議事堂の雄姿は他を圧していたのである。

議事堂が全く見すばらしく見えるようになったのは、すぐ近くに38階の三井霞ヶ関ビルが建てたからである。38階にある展望台から見ると、議事堂が何と小さく見えることか。緩やかな坂の上につくった議事堂は、その坂の下の方から仰いでこそ立派な景観なのに、正に見下して見るようになったのである。

その38階のビルも、その後たくさんできてきた超高層ビルの存在のために、もう人々の口にあまりのらなくなってしまった。現在、最も活発に高層化が進められているのは新宿で、50階前後の建物が一つは完成し、あと三つが大体の姿を現わしている。四つの超高層ビルができてみると、それまで最高を誇っていた47階の京王プラザホテルがたいして高く見えなくなってくるから不思議である。

そういえば、かつてニューヨークを旅行した時、東京タワーより100メートルも高い102階（380m、テレビ塔を含めると441m）ものエンパイアステートビルがそれほど高く見えなかったことを思い出す。まわりに数十階のビルがいくつもあるので、それほど感じなかったのである。しかし、もし現在、102階のエンパイアステートビルを東京の真中に建てたら、人々はどのような印象を受けるだろうか。

窓外に展開するスカイラインは、日ごとに形を変えて行くようである。だがそれにしても、まだ1・2階の家の何と多いことか。世界の巨大都市で、都心からそれほど離れていない所にこれだけの小住宅を密集させている所は他にない。まことに日本的な景観を毎日満喫しつつ、移りゆく景観を眺めている。

地 域 社 会

内 藤 博 夫

郷土であり、居住地でもある八王子市は今や人口28万人、近年急激に都市化されつつある地域である。自宅の周辺をみても、背後にある高台を越えて、桑の実を盗み取りしながら、小学校へ通った頃の畑作景観は見ることができなくなった。都市計画道路が走り、区画整理が進み、新しい住宅が次々と建てられている。工業団地は小学校と目と鼻の先に建てられてしまった。たしかに生活は便利になったが何かさびしい気持ちに襲われる。